特集：SENDプログラムの「実践報告」

コンケン大学教育学部における SEND 協働の実践研究

—タイ東北地域の中等学校におけるティームティーチング実習—

高橋　美紀・スヤラー　ワッチャラー

要　旨

コンケン大学教育学部日本語教育課程では、初等中等学校で教育実習中の 5 年生と Waseda SEND Program 学生がティームティーチング実習を行った。専門が同じであるタイと日本の大学生・大学院生が共通の目的をもって実習に臨んだ。同じ立場で、派遣前の活動計画、授業案の共有と提案、情報交換を繰り返していく中でタイ人実習生だけ、日本人実習生だけでは生まれない新たな授業活動の創造が見られた。

キーワード

日本語教育実習　ティームティーチング　タイ　中等教育

1. はじめに

コンケン大学教育学部日本語教育課程では 2 週間の Waseda SEND Program（以下 WSP）の受け入れを行い、そのうち、1 週間は本学の 5 年生である教育実習生とのティームティーチング実習を行った。本稿ではそのティームティーチング実習を紹介し、従来の交流活動では見られなかった活動の意義について述べていきたい。

2. コンケン大学教育学部日本語教育課程について

2.1　コンケン大学教育学部日本語教育課程について

コンケン大学教育学部は 10 の専門課程を有する学士課程と修士、博士課程からなり、附属学校として幼稚園、初等学校、中等学校が敷地内に設置されている。タイの教育学部学士課程は 5 年制で、1 年生から 4 年生までは学部で教育学や専門科目について学び、5 年生の一年間、主に中等学校で教育実習を行うことになっている。

コンケン大学教育学部日本語教育課程（以下 TJL）は 2004 年に設置された課程で、2005 年からは国際交流基金からの日本語上級専門家の派遣のもと、中等教育機関で活躍するタイ人日本語教師の養成を行っている。教員の構成はタイ人教員 3 人、日本人教員 3 人で、内、国際交流基金からの派遣日本語上級専門家が 1 人である。学生は 1 年生から 5 年生まで約 150 人が在籍する。卒業までに必要な単位数は 171 単位で、その内、タイ国の教職科目として 54 単位、日本や日本語に関する専門科目を 81 単位履修しなければならない。入学時は日本語未習者が多く、4 年生で多くの学生が N3 から N2 レベルに到達するが、5 年

生の教育実習中の日本語力の保持が課題となっている。

教育学部では履修単位に関係なく様々な活動を行っている。1 月の子供の日には教育学部に地域の子供達を招き、それぞれの課程が趣向を凝らした体験イベントを行う。また、TJL の活動としては、タイ東北地域の中等学校を訪問し「日本語さくらキャンプ」「日本語・日本文化プロモーション」を行ってきた。また、教育実習生をはじめ、大学卒業後も中等学校で日本語を教える現職教員のブラッシュアップを主な目的とした「日本語教育ワークショップ」も年に二回開催している。これらの活動は国際交流基金の助成を受けて行われている。

留学については日タイ間の教職課程における単位の互換が難しいことから、日本人大学生を長期的に受け入れる機会は限られている。2004 年の課程設置以来、日本人交換留学生が来たのは 2013 年度の 1 人だけであった。タイからの留学先としては日本留学が一般的であるが、日本以外の国へ留学し日本語学習する場合もある。日本留学については近年では 2013 年と 2015 年に大使館推薦による日本語・日本文化研修生として一年間渡日した学生が一人ずついた。その他にコンケン大学や教育学部と協定を結んだ大学に交換留学生として留学する学生が毎年 10 人前後いる。日本以外では、中国四川省の西南大学[1]で 2014 年に夏期日本語プログラムが開かれ、5 人の学生が中国での短期日本語プログラムに参加した。

卒業生の多くは、卒業直後の雇用形態は異なるが、中等教育機関で日本語を教えている。特に、2013 年に始まった第二外国語普及と教員不足を解消するための特別試験[2]には 2013 年に 5 人、2014 年に 14 人、2015 年に 25 人、2016 年に 21 人が合格し、研修終了後はタイ全国の中等学校でノンネイティブ日本語教員（以下 NNT）として勤めている。また、TJL では現在、卒業生やワークショップ参加者とのネットワーク作りを目指している。

2.2　教育実習について

前述のとおりタイの教育学部は 5 年制で、最終学年である 5 年生は 5 月から翌年 2 月までの約 10 か月間、初等・中等学校で教育実習生として実践経験を積む。実習校での勤務のほか、1 か月に 1 回程度学部での実践報告会があり、1 月には実践研究レポートの提出と発表会が行われる。

TJL 実習生が派遣された初等・中等学校は、WSP 開始年度の 2014 年度 12 校、2015 年度 18 校、2016 年度 12 校であった。そのうち、2014 年度は 5 校、2015 年度と 2016 年度は 6 校に JF 専門家、日本語パートナーズ、青年海外協力隊、学校との直接契約などによって日本人教員（以下 NT）が在籍していた。

実習校に NT が在籍するかどうかは実習生の日本語力に影響を与える。NT 在籍校では教授項目をはじめタイの学校文化や社会について日本語で説明する機会が常に与えられる。一方で、NT 不在校においては教授項目も入門から初級であるため、実習生が日本語を使用する機会はほとんどない。そのため、NT 不在校の実習生の日本語力の維持が課題となっている。

3. ティームティーチング実習の概要

WSP 学生は、NT 不在校であるコンケン大学教育学部附属初等学校、附属中等学校[3]、市内にあるガンラヤナワット中等学校[4]で TJL 実習生とティームティーチングでの授業を行った。

初年度は来タイ前のコミュニケーション不足と準備不足という反省があったことから、二年目と三年目には来タイ前に TJL 実習生と WSP 学生のグループを Facebook 上に派遣される学校ごとに作り、略案や授業で使用するスライド案をやり取りしながら授業計画を共有した。双方の意見を取り入れた授業スライドの作成を行うことによって、事前準備と事前交流を図った。実習内容については現場指導教員と TJL 実習生、TJL 指導教員が話し合い、日本語を教える授業ではなく文化紹介や文化体験を通して WSP 学生のことを知る活動を計画した。各グループには TJL 指導教員の高橋とワッチャラー、WSP 指導教員の鈴木先生も入り、必要な場合はグループへの発言や学生個人への指導を行った。

コンケンへ到着後は一週目にそれぞれの学校を訪問し、朝礼での自己紹介などを行った。その後、クラスを見学し、生徒たちの様子を見た上で、教案やスライドの修正を行った。二週目は各曜日に行われる日本語クラスで TJL 実習生と WSP 学生によるティームティーチングを行った。

授業計画活動例 1：

① 子供たちの興味関心から各学年の活動内容を計画提案（TJL 実習生）：日本の遊びやおもちゃを紹介したい

② 教室活動に合う活動内容の提案（WSP 学生）：だるまさんの一日という子供の遊びの紹介

③ 新たな活動内容を創造（TJL 実習生・WSP 学生）：だるまさんの一日をアレンジして「だるまさんが（動物）になった」というのはどうだろう。

授業計画活動例 2：

① 子供たちの興味関心から各学年の活動内容を計画提案（TJL 実習生）：日本の子供の日など行事を紹介したい

② 教室活動に合う活動内容の提案（WSP 学生）：8 月の年中行事であるお盆と盆踊りを紹介

③ 子供たちの興味関心についての情報提供（TJL 実習生）：タイの子供たちに人気があるアニメには一休さん、アラレちゃん、ドラえもん、ワンピース、NARUTO などがある。

④ 新しい活動内容を提案（WSP 学生）：夏の行事紹介の後にアラレちゃん音頭をみんなで踊る。

4. ティームティーチング実習の成果と意義

最後に、今回のティームティーチング実習が従来の日本人との交流と異なる点を述べる。

① TJL 実習生と WSP 学生（特に大学院生）は日本語教育が専門という共通点があり、実習生同士の対話の中で共感性が高かった。

② 児童生徒に日本のことを知ってもらいたい、好きになってもらいたいという点で実習の目的が一致している。

③ WSP 学生が TJL 実習生と同じ制服を身に着け、同じ実習生という立場で学校に存在することで、一方的に教えたり聞いたりすることなく、お互いの考えやアイディアを受け入れたり表したりすることができた。

④ 1 か月前からのウェブ上での事前交流と 2 週間という比較的長い滞在時間があったため、予定が変わりやすいタイの学校においても余裕をもった準備をし、授業に臨むことができた。

⑤ TJL 実習生と WSP 学生がそれぞれの情報提供と提案を繰り返すことで、NT や NNT が単独で行う授業にはない新しい授業や活動を作ることができた。

ティームティーチング実習では、NT と NNT が同じ目的を持ち、お互いを補い合いながら授業や活動を作り上げていく経験ができたことに意義があったと感じている。今後も様々な形でティームティーチング実習が継続されることを願う。

注

1 タイの大学に設置された孔子学院には、各々の提携先となる中国の大学が指定されている（末廣 2014）。教育学部外国語としての中国語教育課程ではタイ人中国語教員の養成のために提携大学である四川省西南大学とデュアルディグリープログラムを 2007 年より開始した。この課程では 3 年生と 4 年生の 2 年間、西南大学への留学による科目履修が必修となっており、タイ中国間の交流活動が盛んである。

2 2013 年から毎年 50 人、合計 200 人のタイ人日本語教師を養成し、雇用する政策で、本採用前に国際交流基金での研修をバンコクで約 6 週間、日本で約 8 週間受けることになっている。（俵 2013；国際交流基金 2014）

3 附属中等学校は 2016 年度 NT を一人雇用したため、2016 年度はティームティーチング実習を行わなかった。

4 同校は NT がパートタイムで在籍し、週に二日来校するが、フルタイムではないため派遣対象校とした。

参考文献

末廣昭（2014）「コーンゲン大学構内の孔子学院」『南進する中国と東南アジア ： 地域の「中国化」』東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点、pp.38-40

俵幸嗣（2013）「微笑みの国「タイ」における日本留学事情と日本語教育」『留学交流』2013 年 10 月号 Vol.31 日本学生支援機構ウェブマガジン、pp.36＜http://www.th.emb-japan.go.jp/jp/jis/

ryugaku_kyoiku2013.pdf＞（2016 年 9 月 10 日）
国際交流基金日本語教育国・地域別情報タイ（2014 年度）＜https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/thailand.html＞（2016 年 9 月 10 日）

（たかはし　みき　コンケン大学教育学部）
（すやらー　わっちゃらー　コンケン大学教育学部）